日雇いコリーと血染めの白薔薇

椎名

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
日雇いコリーと血染めの白薔薇

【Ｎコード】
Ｎ５０３８ＢＡ

【作者名】
椎名

【あらすじ】
日雇いコリーと、どこかを見ている少女。

（前書き）

ご閲覧頂き誠にありがとうございます。
本作はシリーズとなっておりますので、お手数ですが未読の方は先に前話をお読みください。

“星屑の休憩所”から少し離れた森の奥。そこに建つ洋館は、いかにも歪な雰囲気を纏わせていた。ここに“白薔薇の錬金術師”と思しき人物がいるのは間違いなさそうだが、入りたいとは思えない。しかし、ずっとここでこうしていては埒があかない。俺は意を決すると、門の近くまで進んだ。一人の少女が門の前に立っている。助手かなにかだろうか。とにかく、彼女に聞いてみるのが無難だろう。

「すまない。ここに住んでるレティ氏に会いに来たんだが??」

「主に会うことはできません。お帰り下さい」

少女は無機質に告げると、俺を見上げて首をかしげた。人間離れした青白い顔に、赤い瞳が印象的だ。よく見ると髪は灰色がかっているようだった。

「なら、せめて伝言だけでも頼めないか?」

「不可能です」

俺が冷静に問いかけると、少女はきっぱりと言い放って顔を伏せた。何か嫌な予感がする。俺は戸惑いながらもはっきりと問いかけた。

「……分かった。最後に一つだけ、教えてくれ。??レティ氏は、生きてるのか?」

「……その答えは、分かっています。しかし??いえ。分かりました。お答えします。主、ギルベルト・レティ様は六日前、何者かに殺害されました」

嫌な予感の的中に、俺は頭を抱えた。この流れからすると、その“何者か”とはラウラのことだろう。手遅れだったか、と俺は小さく呟いて舌打ちをした。

「おい、その何者かってどんなやつだった?」

「さっきの質問が最後なのでしょう? パティーにはもう何も答えられません」

自分のことをパティーと呼んだ少女は、棒読みで告げると両手で耳を塞いだ。質問は受け付けない、という意味らしい。これ以上は無駄そうだ。俺は肩を落としてため息を吐く。しかし、そこであることに気づいた。

「……ちょっと待てよ。ロットーが殺されたのが八日前。レティが殺されたのが六日前だよな？　なら、移動時間からしてラウラには？？」

殺せないだろう、と言いかけ、背後に視線を感じる。

「おいコリー！　何で君がここにいるのさ？　？？まさか、ボクを止めようとか思ってないよね？」

後ろから現れた小柄な少女？？ラウラは、初めて会ったときのように頬を膨らませた。しかし、その目つきは真剣そのもので、静かな殺意さえ感じられた。

「ラウラ……お前、やっぱり」

「新しいお客様ですか？　主はもういません。お帰り下さい」

俺の横を通り過ぎたラウラは、パティーに近づいて目を細めた。幼さは微塵も感じられない。

「パティーとか言ったっけ？　君、レティを殺した奴を知ってるでしょ。しかも、君はそいつのことを話さないようにレティーから言われてる。……そうでしょ？」

「主の命令は絶対です。主が死んだ今、私にはその命令に従うことしかできません」

パティーはそう言うと、黙り込んでしまった。ラウラは眉を顰めて地面を見ている。

「なら、ボクが君の新しい主になるよ。そうすれば答えてくれるんだよね？」

「あなたが、私の主に、ですか？　それは……ええ、あまり嬉しくありませんが？？いいでしょう」

パティーの言葉に、俺は拍子抜けした。彼女はもっとレティに依存しているものだと思っていたのだ。しかし、彼女は意外にあっさ

りと了承した。戸惑っているようにも聞こえたが、それもほんの些細な変化だった。パティーが小さくお辞儀をする。俺はラウラの強引さに呆れを通り越して感心した。
「パティー。レティを殺した奴。??その女の名は」
「あぁら、久しぶりね。アストルガのお嬢さん?」
ラウラの声を遮った女性の声に、彼女は身を強ばらせて後退した。パティーは無表情のまま、屋敷の庭を見ている。
「“紅腹の魔術師”??やっぱりお前か!」
「何のおつもりですか? ロース=マリー・フェルト様。ここにはもう用はないはずでは?」
“紅薔薇の魔術師”ロース=マリー・フェルトと呼ばれた女性は、手元の白いバラを手折ると、それに銀のナイフを突き刺した。
「こうなりたくなければ、パティーをこちらに引き渡しなさい」
フェルトが言い終わると同時に、パティーが手榴弾を投げた。その隙にラウラの手を取り走り出す。状況に戸惑いながらも、俺はただ少女の背を追いかけていった。

（後書き）

お読み頂き誠にありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5038ba/

日雇いコリーと血染めの白薔薇

2012年1月14日05時48分発行